

書 評

『虹の歩み』 勝部 欣一著 ほんの木

定価1500円 332頁 井之川 平等 (コープかながわ)



生協のトップには、大別して2つのタイプがあるように思う。事業家と運動家である。事業家は計数に明るく、運動家は数字に弱い。どちらも組織人だが、事業家タイプはシステム型思考が強く、運動家タイプは人間関係に強味を発揮する。こうして見ると勝部さんは誰が見ても運動家タイプである。この勝部さんが古稀を目前にして著書が出版された。新聞雑誌等への寄稿は別として、まとまったものを出されるのは初めてとの事。勝部さんは知る者にとって意外である。それだけに渴望されたむきも多かったに違いないし、私もその一人である。なにしろ勝部さんがわが国の生協運動に残された足跡は大きく、また多彩である。その意味で300頁をこす本書のすべてに『くらしの協同を求めて50年、生協・消費者運動とともに生きた歴史の証人』としての勝部さんの存在感が充ち溢れていると言える。

前置きはさておいて、本書は全体で5章の構成になっているが、第1章くらしの協同を求めて—私の運動史と第4章くらしとエコロジー、価値ある協同運動、の2章が圧巻である。この2章だけで全体の70%、220頁を占めているわけだが、長らく生協運動のトップにあった勝部さんの人となりとパッションが伝わってくる思いがする。

ひとくちに50年といっても戦前の家庭購買会からはじまって、戦後の生協運動にリーダー的役割を果たした東大生協の誕生物語、日本生協連発足のいきさつ、消費者運動とのかかわりから国際的な協同組合運動への参加まで、まさしくこの人ならではの証言集といえよう。

それにしても勝部さんほど内外の協同組合人に知人友人を持っているひとはいないのではあるまいか。いや協同組合人とどまらず勝部さんの交

友範囲の広さは驚嘆に値する。まじわりのひろさは、活動領域の広がりや好奇心の多様さと無関係ではないだろう。

1970年代以降の生協運動が急速成長を続ける中で生協、消費者運動にかかわりを持つようになった多くの人々にとって、先人たちが地を這うようにして協同組合の礎を築いてきた折節を、当事者の言葉を通して知ることができるのは幸である。

吉野作造、賀川豊彦、末弘厳太郎、南原繁といったその名前を聞いただけで、一つの時代、ひとつの思潮を代表するような人々の生身身に接し、多くのものを吸収してきたからこそ今日の勝部さんがあるのであり、そのことは大変うらやましいことだと言えるかも知れない。

なかでもコープこうべの創始者で日本生協連の初代会長でもあった賀川豊彦さんとの交情については、特別に1章を設けてさまざまなエピソードを紹介しているが、大先輩の素顔の一端を知ろうと、貴重な報告になっていると思う。

しかし何といても生涯現役を地でゆく勝部さんが握って放さないテーマは、環境問題でありエコロジーである。かつて洗剤問題をいち早く生協の課題にかかげ、L A Sの追放、高級アルコール洗剤開発の先頭に立った勝部さんは、今日も電気自動車の開発やクリーンエネルギーの紹介に情熱をもやす人である。その見識はボカシ堆肥から太陽エネルギーにいたり、その見聞はネパールの環境運動からブラジルサミットにおよぶなど文字どおり多岐にわたる。環境問題が21世紀につながる生協の最重点課題であるとする考えが広まるなか、本書はそうした意味からも実践にうらづけられた説得力ある必読書といえる。

読者の一人として望むことは、50年の歩みの間にあつたであろう幾多の論争やさまざまな葛藤を、歴史の証人として後輩のために書き残して欲しいということである。ぜひ続篇を期待したい。